

二人は倉庫から抜け出すと、敵のアジトを見つけ出すことにした。奪われた二人の所有物が彼らのとらわれた場所の近くなかった以上、アジトにあると考えたからだ。とはいえ、近くに区別がほとんどつかず、窓があまりついていないために中をのぞき見ることがなかなかできない倉庫しかないこのエリアでそれを探したすのは困難だった。故に二人は先ほどのした男のうちの一人をたたき起こし、情報を聞きだすことにした。一人の男を物陰に引っ張っていき、そして「おい、おきろよ、おい」と雄二は男の体をゆする。結果、男は起きる。勿論、男の自由を奪うために手と足は縛ってある。淳の氷でだ。

「おい、お前。俺たちの持ち物、どこに置いた！」

「う、うう。なんだ。あ、お前ら、縛ってたはずなのにどうして」

「そんなことはどうでもいいんだよ。俺たちの持ち物だよ、持ち物。どこにしまったんだ」

「そうか、俺はお前たちに」

男はそういつてコクリとうなずき一人で納得した後、二人に「持ち物って、かばんとかか。それだったら2の4番倉庫の中においてある」と話した。

「へ？」

逆に雄二は男がすんなりはいたことでぼかんとしてしまふ。そしてこれがうそだと判断した雄二は、男の胸倉をつかみ、「てめー、うそついてんじゃねえだろうな」と威圧した。しかし男は動じず、「うそなどつかん。つく必要がないからな」と返す。

「どういう意味だ！」

「いいか、俺たちは弱肉強食、勝者絶対という考えを持ってゐる。そんな集まりが俺たちなんだ。お前たちは俺に運よく勝った。だから俺がお前の言うことを聞くのは当然なんだよ」

雄二は「何だソレ」とつぶやきながら淳の顔を見た。

「うん、うそは言っていないみたいだし、信用しても良いんじゃないかな」

「まあ、確かに。でもなあ、なんか拍子抜けっていうか、な

んだかなあ」

「良いのか？ 俺のようなものの言葉を簡単に信用して」

「本当はだめなんでしょうけど、他に方法もないですし…」

「はっ、お前ら馬鹿だな。もしこれが俺たちじゃなければ、絶対に罠にかかってるぞ」

「ってことは、罠じゃあないんですよね？」

「さあ、どうだかな」

男はふっふと笑うと言葉を付け足した。

「いいか、そこは一応俺たちの拠点になってる。だからこそ、そこに乗り込むんなら、相当の覚悟をしておいたほうが良いぞ」

「へえ、じゃあそこにさっきの茶髪の兄ちゃんもいるのか？」

「パイ・リーチェンか？ いや、やつはそこらへんで寝てるらしい」

「なんでだよ」

「本当は彼にはホテルを取っていたらしいが、お前たちが逃

亡を企ててると分かったらここにとどまることにしたらしい」

「じゃあなんでその拠点にいないんだよ」

「見られてはいけないものが少ないがあるからな」

「は？ 俺たちにそのことを教えちゃって良いのかよ？」

「言ったらろ、勝者絶対だつて」

淳は雄二に「なんか、怖いね」とつぶやく。すると男はまた軽く笑いながら「他に聞きたいことは」と聞いてきた。

「そのアジトにはどのくらいの人がいるんですか？」

「それは分からんな」

「わかんないのかよ」

「ああ。ひよつとしたらほとんど全員が見回りに行ってるかもしれないし、逆かもしれない。なにせお前たちがドンとか大きな音を出したから、今非常時となって各々が勝手に動いているだろうからな。調査結果も送れなかったことだし」

「ちっ、そうか」

「ゴメン、雄二」

「しかたねえよ。そんなの、俺だってわからなかったし」

「うん、でも……」

「じゃあ聞くけど、あの方法以外に何かあったか？」

「それは……」

「だろ、仕方なかったんだって」

「おい、もう他に聞くことはないのか？」

「うーん、そうだ、一応逃走ルートを教えてください。あと、

その2番倉庫がどこら辺にあるかも」

淳の言葉に男は二人にその説明をする。そして「もう、ないのか？」と再び尋ねた。

「はい、もう大丈夫です」

「なら最後に耳寄りな情報をひとつ。俺たちの部隊のリーダーは非常に強力な能力者で、水を操る」

「え」

その言葉に淳は驚くが男は「まあ聞け」と話を続けた。

「だがあいにくリーダーは今所要でここにはいない。明日の朝に戻ってくるみたいだから、逃げるんだったらそのときまでには逃げきっておくんだな。それと、俺たちは銃で武装はしているが、能力者はパイしかいない」

「パイってあの茶髪、だよな？」

「ああ、そうだ。俺たちの中には能力者はいないから、変則的な攻撃はほとんどないと思って良い。勿論、みな銃の扱いにはとても慣れてはいるが、先制さえ取ればお前たちでも負ける要素はないだろう。実際、俺たちはこの部隊ではトツプスリーに入るくらいの小隊だったからな」

「そうか、ありがとうよ」

「そんぐらいだな。いくならもう行け。行動はなるべく速く起こすに限る。いまなら情報も混乱しているだろうしな」

「ありがとうございます」

「礼などいらん。お前たちは勝者なのだから。だが、次にあったときは俺がお前たちを殺してやる」

男は不気味に笑い、それを気味悪がった雄二は男の後頭部に手刀をおろす。男は見事一撃で気絶し、「おお、マンガミたいにうまくいった」と雄二は驚くが、淳は「い、いやたままでしょ。次はうまくいかないかもだから、もうやらないでね」と雄二をたしなめた。

二人は2の4番倉庫を目指し、走っていた。途中、何度か敵とであったが、何人かは先制で倒し、また、ある敵の攻撃は事前に気づき、何とかガードしていた。雄二は拳銃から出た火花を火種に火を手に入れていた。その炎と淳の水で銃弾を防ぎつつ、向かってくる敵をなるべく大きな騒動にならないようにしながら倒していった。このとき二人は驚いていたが、敵の配置、行動、攻撃を広い視野と圧倒的な動体視力、反射で見切り、そして時に圧倒、時にかろうじて、しかしちやんと倒すことができていた。修行を怠らずにやっていた成果である。もちろん、たった一人だけだったり、急造のコンビだったりした場合、彼らの実力ではとてもではないがこの場をしのぐことはできなかつただろう。長年連れ添い、ともに修行に励み、何度か死線を潜り抜けてきたふたりのコンビネーションは抜群であり、お互いの死角を他方が完全にカバーしていた。穴のないフットワークだったからこそ敵も手出しできなかつたのだ。もちろん、運も非常によかつたのだらうが。

ようやく2の4番倉庫に着いたとき、あたりには誰もいなかった。倒したわけではない。本当に近くに誰もいなかったのだ。そして中の様子を伺うと、やはり誰もいなかった。妙だとは思ったが、二人があたりをかき回したせいだと結論付け、そして倉庫に入ることにした。このとき、入るのは雄二だけにして、淳は見張りをすることにした。数分たった後、雄二は彼らのバックが鍵のかかった部屋に入っているのを見つけ、何とか鍵を壊そうと試みた。そして鍵が壊れ、雄二が中に入るとほぼ同時。淳は背筋が凍った。背後から圧倒的な悪寒を感じ取ったからだ。その瞬間は雄二が鍵付きのドアを見つけ、中に入ったときだったので、倉庫の中の様子をドア越しに淳は見ていた。つまり、本来見張りをしていた場所に背を向けた瞬間だったのだ。

淳はおそろおそろ後ろを振り返る。そこにはたった一人が立っていたが、その一人が重要だった。そう、それはあのパイ・リーチェンだった。

「オヤオヤ。よくここまでたどり着けましたネ。この場所ハ誰カに聞いタンでしようが、でも、いやはや。多くの敵を倒

してココまでこれたことはスばらしい。しかしなぜ逃げずに
コンナところに来てしまったのでスカ？ もし逃げていれ
ば、確実に逃ゲ出せていたでしょう？」

ニコニコ笑いながらパイは語りかけていた。しかし、その
笑顔に包まれた目の奥に隠された殺意に淳は震えを隠せな
かった。

「ま、エサは一匹いればいいでしょうし、一人位やってもカ
まわナいすカね」

パイはチャンパオと呼ばれる中国服の両腕の袖から刃を
伸ばし、そして伸ばし終えると同時に消えた。否、高速で淳
に襲い掛かっていたのだ。そして大きく右腕を構え、刃を右
に振った。淳は何とかこれに反応し、よけるが、しかしよけ
た後、なぜかたおれた。体を痙攣させ、息も絶え絶えとして
いた。

「私のスピードに反応できるとは本当にすばらしい。さすが
はあの赤い死神の弟子といったところですか。ですが残念で
したね」

淳はパイに首をつかまれ、持ち上げられる。そしてパイは

淳の左胸に刃を突き刺した。